



薄櫻記

五味康祐

新潮社

薄櫻記

昭和三十四年十月十五日 發行
昭和三十四年十一月二十五日 三刷

定價 貳百九拾円

著 者 五味 康 祐

発 行 者 佐 藤 亮 一

発 行 所 株式会社 新 潮 社

東京都新宿区矢来町七一
電話東京(34)代表七一一(九)
振替 東京 八〇八番

乱丁・落丁のものは本社又はお買
求めの書店にてお取替えします。

印刷・塚田印刷株式会社 製本・神田 加藤製本所

© by K. Gomi

目

次

再	東	夢	色	烏	雨	柿	歳	吾 ^{われ}	鏑	硯
	下	の花さへ		帽	蕭	のへた		亦 ^も		
会	り		里	子	条		月	紅 ^{こう}		
.....										
二三	三三	三三	二〇三	一九五	一八三	一七〇	一五八	一四五	一三三	二三

残	月	二四
付	け	二六
旅	いまだ歸らず	二七
花	を折って	二七
雪	の	二八
夜		二八
討	入	三〇

装幀 杉本健吉

薄^{はく}

櫻^{おう}

記^き

麒麟児

江戸小石川中天神下に一刀流指南の看板を掲げた堀内道場がある。

当主源太左衛門正春の父は、武州館林の城主松平伊豆守の家来だった人で、知恵伊豆と謳われた主君に常々目をかけられていた。至って人柄が実直で、物事に小才覚せず、愚鈍のように見えるのが却って知恵伊豆の気に入ったのである。武芸は一刀流免許の腕前で、日頃備前物を愛用していたが、この刀、切先三寸ばかり焼きはずれがあつて、

「あたらかかる名刀に焼きは、ずれありとは」

と人々に惜しまれた。当人は、

「何、刀は切先は要らず、物打さえ焼が^やあれば物の用に立つものよ」

と一向に平気でいる。

或る年。

伊豆守の意に叛いて屋敷に立籠って弓鉄砲を構え、必死に反抗した家臣があつた。この上意討ちを堀内嘉左衛門が命ぜられた。嘉左衛門は早速家来を従えて謀反者の宅へ赴き、堀内へ馬を横に乗附けて「やっ」と一声するや堀を躍

り越え、忽ち内に居た郎党兩三名を仆した。それより門を開けて家来を招き入れ、自ら謀反者の籠る書院へ斬込んで悉くを仆したが、自らも深手を負うて遂に書院内で討死した。その時の刀を見ると、つば元で切った跡ばかりだったという。

この嘉左衛門の子が道場を構えた源太左衛門正春である。江戸の町道場といえ、元禄時代先ずこの堀内道場が一番だった。門人も多く、奥向き出稽古をねがう大身の旗本も多い。

ところで、元禄六年の暮も迫った十一月すえに、新入門を願つて来た浪人者があつた。

別に門弟たちの紹介もないので、源太左衛門が念のため太刀すじを見てみると、あきれ返った下手糞である。

「いづれで修業いたされたかは知らぬが、その手の内では数年練磨してようよう切紙程度が当道場の順位であるが、よいのか？」

なかなば^{ひんしゅく}聲の面持で問うと、

「結構ですな」

あっさり答える。眉の秀でた実に涼しげな眼許だった。色が白く、年を問うと二十四歳と答える。

「生国は？」

「越後新発田」

「いつから浪人いたされたな？」

「左様、——もう五年になりますか」

静かに囁^{ささや}った。少しも悪びれた様子がない。

源太左衛門はじつとその男の眼を見入ったが、

「よろしかろう。明日からなりと稽古に参られい」

それから師範代の高木敬之進を手招いて、

「今日より新入りの仁じゃ」

引会わせると、つと道場を立て奥へ入った。

高木敬之進は三十八。師の源太左衛門より二歳の年長で

ある。他の門弟の稽古をつけながら、先刻、師の前に太刀

すじを披露するのを横目で見ていたのである。

「よくお主の入門を先生が許されたわ。ま、折角修行いた

されるがよからう」

言い捨てて、これももう相手にならない。道場床板に坐

った儘の相手を見下して立つと、おのれの座へ戻りながら、

「念のため聞いておこう、姓は？」

「中山安兵衛」

翌日から安兵衛は堀内道場に通った。住居は牛込天龍寺

竹町にある。そこから歩いて天神下へかよう。

一刀流は古風の形兵法を重んじて袋竹刀を排したので、

柳生流の試合籠手やタイ捨流の円座などを支度する必要は

なかった。もっとも、一刀流は下段から中段の構えが主だ

から、突当ると危険なので初心者には竹鎧という一種の胸

当てが用意されているが、安兵衛これを須^{もと}いない。

常時、堀内道場には二百人の門弟がいた。そんな中へ、

越後訛^{まが}りのある二十四歳の田舎青年が混^まつての稽古であ

る。抜群の腕前なら兎も角、師範代の高木が匙^しを投げた凡

手だから殆^たんどのは相手にはないし、声もかけぬ。安兵

衛が門下に加わったのを知らぬ者が大方だった。

時々、それでも御節介を焼きたがる先輩がいるもので、

「中山、一手参ろうか」

手をとるように教えてくれる。

「そ、その間合ではとてもものに当流の型は覚えられぬ。

もそつと、前へ」

「こうですか」

「まだまだ。肘を今少しさげて」

言われる通り素直に安兵衛は木刀を構えた。或る時これ

を見かけた師の源太左衛門が、あとで居間に呼んで、

「その方は親切で致したことであろうが、あれでは型には

嵌^はって人も人は斬れぬ。わしに思う仔細もあれば以後、中山

を指導するは歇^{やす}めに致せ」

先輩は不満の頬を脹^はらまして、

「拙者はただ中山の為によかれと存じて致したること、仰

せでは、まるで拙者、人が斬れぬような——」

「何でもよい、とにかく中山には構わぬ方が良からう」
時々やすむ。

牛込竹町の浪宅で内職の筆造りに忙しいのである。筆は米沢藩の名産で、米沢の家中の賤士なども内々、江戸詰の出賃を補うため始めていたが、その材料を分けてもらうらしい。そういう内職をするようではお国許の親戚とやらも噂ほどの御身分ではないのである。うと長屋の他の住人は囁きあった。家主六次郎が店子として安兵衛をこの裏長屋へ入れたときの話では、何でも、越後溝口家でかなりな重臣の血すじという前触れだったからである。

長屋に住む大方は人形売りや俵売り、大工、左官などの真面目な町民で、安兵衛はあまり附合いがなかったが、共同井戸で朝の挨拶をうける時の態度などは腰がひくく、鄭重だった。

「あのかたは今に偉くおなりなさるぜ」

二三度、朝の挨拶をうけた大工などは感激して女房に告げた。

道場では至極目立たぬ存在だったから竹町の浪宅を訪ねてくる者は無論ない。相変らず、というより、いよいよ道場で安兵衛は孤独の人だったわけである。

ところが大晦日も旬日にせまった或る日、道場では比較的軽輩の者数人が打連れて芝居見物に往くことになって、珍しく安兵衛も仲間入りをしたが、さて見物の武士たちが刀のツカを上にして持っているのを見て、ふと笑った。仲間の一人がこれを見咎めてなじると安兵衛は言った。もし

事があったらどうなさる、昔から殿居^{とらい}の武士は必ずツカを下にしている。

芝居見物に往った大方は小普請といつて非役だから、旗本でも暇のある者が多い。

だいたい、堀内道場に通うのは部屋住みの二男坊か諸藩の家中でも比較的暮し向きに余裕のある者で、武辺で世に出る時代ではもうなかったから、武士のたしなみと言え、内実は暇つぶしの稽古である。よほどの田舎者か、古い時代を慕う無骨漢でもなければ、性根を据えて武道に身を入れなかった。従って道場稽古も、幾分そうした時代の好みにあうように出来ている。型の華麗さや、太刀捌きの残心のとり方などで矢鱈に味を見せようとする。

武芸も実戦向きではなかったわけなのである。

芝居を見ていて、刀の持ちように小賢しい意見を述べた安兵衛などは、だから感心されるところか、何たる田舎者よ、と嘲侮の目で見られたにすぎない。もう少し気の大きい者は、

「こ奴おもしろい男じゃ」

無粋者を粹人が却って酒のサカナにする——その程度の気安さで、

「どうじゃ、今宵皆で一席もうけるが、貴公も同道いたさるか」

誘うようになった。

三度に一度は安兵衛も附合う。まんざら酒は嫌いでもなさそうである。当時は、この年（元禄六年）十一月に、諸大名旗本の遊女町に遊ぶことを戒めた触れが出たばかりで、以前のように仲之町あたりに登楼するのは慎しまねばならぬ、酒宴をはると言っても至極みみちいものである。それでも興いたれば談論風発、大いに美女の品定めをやり、部屋住みの無聊をかこち、道場先輩の誰彼の実力を嘲笑う。あれは世智にたけてはおるが、いざ鎌倉となれば我ら程に用には立つまい、なぞと肩をそびやかす。他愛のない、要するに残念会である。安兵衛は終始おだやかな笑顔をうかべて、末席で、チビリチビリやりながら聞いている。本当は酒量のもっとも多いのはそんな安兵衛だったかもしれない。

それでいて、顔色ひとつ変えなかった。酒豪のお手本みたいな男である。

或る晩、そうして例によって数人で浅草川端の料亭にあった。さかずきの献酬がかなりすすんだころ、

「丹下さんが近く帰府するそうなが貴公、聞いたか」

上座にある一人が隣りへ盃を渡した。小普請で眉の細いのが自慢の男である。

「聞かいでか。内々どうなることかと案じておる。——おぬしのように、まだ妻も娶らぬ男には丹下さんの苦衷分る

まいがな」

「分る。分るから訊いたのじゃ」

「併し武兵衛どの」

これは安兵衛の向いに坐っていたのが、盃を洗い、ぐいと上座へ腕を延ばして出して、

「そのこと丹下どのは存じておられるのですか」

「分らん。人の口に戸は立てられんで、或いはもう耳に入っておるかも知れん」

「では、どういうことに相成りますか」

「きまっておるわ」

眉のはそいのが己が事のように眼を据えた。

「不、不義密通をいたしたような妻ならいかに家老の娘とて……」

「野母、言葉をつつしめよ」

武兵衛と呼ばれた上座の武士が眉のはそい相手をたしなめた。

「夫たる丹下氏が申されるなら兎も角、道場仲間のよしみとて、我ら如きが左様のこと滅多に口にいたしてはならん」

「併し、もはや隠れもなき事実ではないか。堀内道場のみではない、そもそも遠山主殿頭さま家中で誰ひとりあの妻女の」

「——分らん男じゃ。不義の有無を今は言うておるのではないぞ。丹下さんの立場を思えと申しておる」

「立場？　これは貴公の言葉とも思えん。——一体、口に衣きぬきせて素知らん顔をいたすが丹下さんへの好意とでも言われるか？　兼ねて丹下氏に兄事する貴公が、そ、その様に冷淡な」

「冷淡ではない」

「では何故忠告いたそうとはせん。そもそも貴公、当初から噂を聞きながら黙っておるゆえ、世間の口に戸は立てられず今では知らぬ者無い迄の醜態とは相成った。貴公さえ早くに忠告しておれば、如何に江戸・大坂に離れておるとは言え、今少し丹下どのにも取るべき手段はあった筈じゃ。だいたい貴公——」

眼を据えて、大分酔いがまわっている。武兵衛はにがりきった面持にわざと苦笑をうかべ、

「もうこの話はやめる。——さ、各々も気分を変えて飲め」

手を拍つと女を呼んだ。綺麗どころが三四人、やがて座に侍へいって嬌声を立てたので此の咄はなは中歇なかやすみとなったが、それでもまだ暫くは、

「本当に丹下氏は知って戻って来られるのかな？」

「分らん。多分は、のう」

「貴公は見たのか」

「何を？」

「不義の現場じゃ」

「たわけたことを申せ、かりにも武士たるものが左様のけがらわしい……」

「相手は知っておろうかな、丹下氏の歸府を？」

そんな私語を交しているのが安兵衛の耳にも入った。

丹下とは安兵衛のはじめて聞く姓である。話の模様で、丹下なる人物の内儀が不義を犯したらしいと迄は分るが、詳しく立入って訊く立場でもないので終始黙って盃を重ねた。

ただ、凡そ武士たる者が妻に不義をされるなぞ、物笑いの骨張であらうに、誰一人、ふしぎに丹下を嗤う者が無い。却ってその口吻では皆の畏敬する人物らしく、いずれも同情的なのが安兵衛の氣にかかった。

それで、料亭を引揚げる途次、同道した武兵衛に尋ねた。武兵衛は小十人組を勤める旗本だがわりかた安兵衛に好意的で、今宵の席へ誘ったのも彼・池沢武兵衛である。

武兵衛は言った。

「さよう、拙者の口から言うも異なるものじゃが、丹下典膳ほどの武士、当代、旗本中に二人とはおるまいの。腕は抜群、こう申しては何だが、お手前如きは一生修行いたされても、あの境地に達するは心許なからう」

「……それほど遣われますのか？」

「遣^つえるの何のと申す段ではない。口はばったいい様であるが、拙者の見るところ当代、旗本中に丹下さんの太刀業を止める者ないのではあるまいか。内々、堀内先生も丹下どのには一目おいておられると、拙者は見ておるが」

池沢武兵衛の住居は金杉天神前・組屋敷にあって、天龍寺竹町へ帰る安兵衛と同方向だから途中で他の面々と別れて二人になった。

酔いは適当に武兵衛もまわっているらしく、日頃重厚なのを好む人柄に似ず、よく喋る。

「当代屈指の仁とも申すべき丹下さんの妻女が、事もあらうに密通とは……拙者、それを思うと人ごとながら胸が痛んでならん。いかなる天魔波旬^{はまぐん}の仕業か……」

「――差構いがないなら、詳しく話して頂けませんか」

「話すも何もありません。魔がさしたのじゃ」

それでも安兵衛の肩に凭れて二三歩よろめいたあと、存外しっかりした口調で話し出した。

丹下典膳は徳川家康の代に、永禄十一年、三州岡崎に於て召抱えられた丹下惣兵衛なる者の子孫で知行三百石。大坂城番遠山主殿頭政亮の組に属し今は大坂京橋口に詰めている。

典膳の妻は上杉家の江戸留守居役長尾権兵衛^{くさへ}の女で千春といった。二年前、世話する者があって典膳のもとに嫁い

で来たが、その年の秋、典膳は大坂城番組を命ぜられたので新婚わずか二月で夫婦は江戸と大坂に別れて暮らすようになった。典膳にはひとり老母がある。新妻千春はこの姑^{しゅうと}によく仕え、丹下どののはさが好い嫁をもたれたと、大番組の家の中でも羨望のまどだったのが、突如、一年あまり前から芳しからぬ風評が立つようになった。

相手は上杉家の侍で瀬川三之丞。見た者の言うのでは背が低く色浅黒く、器量人物ともに典膳とは比較にならぬが、ただおもいやりがあって人に親切で、そんなところが兼々権兵衛の氣に入られていたらしい。新妻千春とは謂わば幼馴染で、典膳の大坂へ赴いたあと、まだ丹下の家風になじまぬことではあり、何かと心細かろうと権兵衛は娘への情にほだされ、折々土産物など托して三之丞を丹下家へ見舞いに遣った。そのうち典膳の老母は咳氣で臥せるようになった。典膳には兄弟はなく僕婢を除けば嫁ひとり姑ひとりである。士分の家来は主人典膳に附いて大坂へ往っている。夫の不在中に、姑^{はは}にもしものことでもあればお詫びの申しようがない……そんな心細さも、千春の胸に萌^もしていたろうが、何かとそれ以来、一そう足繁く三之丞は千春の許を訪ねるようになって、遂にあやまちを犯したのではあるまいか、というのが双方の事情に通じた者の言だといふ。

「むろん、あきらかに濡れ場を見たと申す者はおらん。大

坂に在る丹下さんが、況してこれを知るわけがない——とは思ふがの。さき頃、同じ大番組の者数人、お役目交替で大坂に赴いた、こ奴らの中には口の軽いのが加わつておるで、要らぬこと喋らぬとも限らず、もし、事実なれば怒髪天を衝くは人情——しかも丹下どのは堀内門下の麒麟児と謳われた遣い手。相手は上杉家の重臣じゃ。……事と次第でどういふことに相成るか」

武兵衛と金杉天神前で別れた。

独りになると些か安兵衛も酔っている。

「丹下典膳……典膳か」

落し差した差料の柄がしらを掴んで何となく呟いて歩いた。寒風が鬢を乱して快よい。越後育ちの安兵衛には、それでも、やっぱり冬は雪が欲しい。

長屋への辻を曲ると、真つ暗な軒並の中で一軒、灯の洩れたのがあった。もう五ツ半にちかく早じまいの長屋の住人たちは夙くに寝込んでいる。

灯の洩れているのは、安兵衛の浪宅だ。

「はテ……」

独り暮しで、むろん家を出るとき灯なぞ点けておかなかつた。

片手引きに表戸を開けると猫のひたい程な土間で、居眠りをしていたのは菅野六郎左衛門の草履取りである。とび

上つて目をさました。

「お、お帰りなさります。旦那様がお待ちでござりまする」

その声より早く内から障子が開いて、

「戻られましたか。さ、これへ——」

若党の佐治兵衛というのが、待ち兼ねた面持で座を譲つて前を通れるようにした。

その向うの奥の間に、ぼつんと六郎左衛門が独り行燈を傍らにして坐っている。白いものがめつきり髪にふえた。

「どうも、夜中出歩く悪い癖がなおりませんで……」

安兵衛はそんな言い方で此の場を取繕ろうと、差料を腰から手に持ち六郎左衛門の前へ来て、立った儘何となく破顔した。部屋隅に内職の筆造りの小道具が油紙の上に拡げている。月々、まとまった金子はこの人から貰っているで、面映ゆいのだ。

「正月も間近かゆえ何かと入用があるうと存じての」

六郎左衛門は内職には知らん顔をしてくれる。

「——佐治兵衛、持参のものを、渡して進ぜなされ」

静かに促して幾ばくかの金子の包みを出させた。

「毎々どうも……」

頭を下げるよりない。膝を揃え坐ると安兵衛もう酔いはふっ飛んでいる。

佐治兵衛が言った。

「都合で、旦那様は近々帰国なされるやも知れませぬのでな」

「お国許へ？」

「其許に聞かせることもないが、ちと仔細があつてな。年のあらたまらぬ裡に戻ろうと存じておる」

菅野六郎左衛門は、伊予西条の城主松平左京大夫の家臣で、既に六十歳。致仕してもよい年だが跡目を譲る悻のないのと、家中に徳望があるので藩侯に惜しまれて今だに御供番与頭を勤めている。中山家とは縁つづきだそうだが、安兵衛自身は十四歳で父と死別し、越後に育ったので江戸詰だった頃の亡父と、六郎左衛門に親交あったことなど覚えてゐるわけがない。江戸で浪人暮らしをするようになってから、どこぞ、主取奉公の際には身許保証人になつてもらうつもりで平生、懇意に交つて来た。若党の佐治兵衛は浪人あがりだが、その佐治兵衛を捉えて常々六郎左衛門が、「安兵衛でも養子に参つてくれればもう」洩らしていることなど夢にも知らない。六郎左衛門には来年十七になる五百という養女があるが、この女性を安兵衛まだ見たことがなかった。

菅野六郎左衛門は寡黙な人なので、少々のごことで打明けはすまいとは察したが、何となくその面差に沈痛の色がある。安兵衛は問うてみた。

「国許へ戻られる仔細とやら、お聞かせを願えませんか」
やっぱり、応えない。

「仔細と申すほどのものではない。ただな」

言つたきり、ぽつんと黙り込んでゐる。

若党の佐治兵衛がこれを見て、

「差し出たようにござりますが、それがし代つて申上げます」

安兵衛へ向き直り、

「兼々御同役の村上庄左衛門どのと旦那様は役向きの儀にて両三度口論あそばしたことがござる。口論とは申しても、旦那様の御気性なれば激しい言葉はお控えなされておりましたに、ちか頃、ことごとくに村上殿よりたてをつかれまするゆえ、この儘江戸屋敷にあっては向後どのような迷惑が及ぶやも知れず、強つて、国許へお役替りの儀を願ひ出られたのでございまするが……」

「もうよい。安兵衛」

「は？」

「其許も越後溝口家に中山ありと知られた四郎兵衛どのの倅じゃ。近頃道場通いにいそがしいと聞いておるが、いかに浪人暮らしとて、正月も間もないに注連飾り一つないとは侘びしすぎる……。わしが帰国は確とまだ定まってはおりぬ。もし正月も江戸で致すようなれば迎えを寄越すで、年始に参つて呉れよな。……それから、酒はあまり過ごさぬ